

本校は進学校であり、卒業生は地域の指導的人材として活躍している。その育成は、伝統校、中核校としての大切な役割であるが、最近はIターンやJターンの学生に地元出身の大学生が「勝てなく」なってきたという話も聞かれるようになった。

高校は「いい大学」にどれだけ合格させたかで評価され、受験校ではその実績を獲得するため膨大な労力を投入してきた。しかし、教育改革という点では、高校の一步も二歩も先を行っている大学に、単に人材を送るだけでいいのだろうか。令和元年度に、早稲田大学から講師を招き、本校で進路講演会を実施した。今の大学生の学びは、ここまで変わってきている・・・、そう実感させられる経験だった。高校の進路指導の現場でも、これまでの観点を大きく改革する必要性もある、と改めて考えさせられた。これからは、大学の学びをリードできる学生を本校から多く送り出すことが、新たな実績として評価されることになっていくだろう。そしてこの対応は、大卒時点で「負けない大学生」を地元を送り出す「遠路」ともなるうるものといえる。

本校は文部科学省の「地域との協働による教育改革推進事業」の指定を受け、マスコミ等にも取り上げられることが多くなった。自ら何かを作らなくとも、地域の人たちとの語らいや学びをプロデュースする、活動を引き出すきっかけを作る、そうした探究の学びというものも普通科の強みとしていかされていくべきだろうと考えている。本校は、「地域との協働」という武器を手にいれたと言ってよく、受験校という特徴を持つ普通科高校の「新しい学び」を構築する責務を帯びたとも言える。そして、この事業を推進するにあたっては、大学での学びとの関係ということを抜きには語れない。これからの大学の学びで活躍できる人材を育成の方針を、この事業の成功を通して手に入れたい。新北生の学びへの挑戦が、地域全体の向上心を刺激し、地元への人の流れを作っていければ、それは中核校としての真の役割ではないかと思う。